

## 空間認識と客観性

小山 悠

—

我々の知覚する対象は客観的に存在するのかわという問題、つまり、知覚の対象は知覚経験から独立して存在するのか、という問題は認識論において最も重要な問題のひとつである。この問題に肯定的に答える立場は伝統的に「实在論」と呼ばれ、否定的に答える立場は「観念論」と呼ばれる。この問題に対する興味深い貢献に、ストローソンによる客観的に存在する対象の認識（以下「客観的認識」と略称する）の成立条件をめぐる議論、およびストローソンの議論を継承したエヴァンズの議論がある<sup>(1)</sup>。

ストローソンは、客観的認識の成立には空間概念の使用が必要である、と論じた。ストローソンの議論の最も重要な論点は、「客観的認識の成立は対象の空間位置の認識を前提にする」という点にある。エヴァンズは、客観的認識には空間位置の認識が必要であるというストローソンの主張を継承しながら、空間位置の認識にはある種の地図の使用が不可欠であり、その地図には対象の位置だけではなく主体の空間位置までもが記載されねばならない、と論じた。本稿はこのエヴァンズの議論の検討を主題とする<sup>(2)</sup>。

以下では、まず、対象の空間位置の認識にはある種の「地図」の役割を果たす表象が必要である、というエヴァンズの議論を検討する。この議論におけるエヴァンズの論点は「地図には使用主体の位置が記載されねばならない」というところにある。さらに、エヴァンズの議論を再構成し、地図の上に主体の位置が必要になる理由は、知覚の生起を説明するために知覚能力の発現可能性を規定する条件として主体の位置が必要になる、という点にあることを明らかにする。

このような地図の使用が客観的認識には必要であるというエヴァンズの議論が正しいとすると、次に問題になるのは、このような地図の使用はそれだけで客観的認識を成立させるのに充分だろうか、ということであろう。エヴァンズは、地図の使用が客観的認識を成立させるのに充分だと考えている。したがって、エヴァンズによれば、我々の認識が空間的であること、すなわち、我々が対象の空間位置を知覚することさえ認められるならば、我々の知覚する対象は客観的に存在することになる。

しかし、このようなエヴァンズの議論は實在論と観念論の対立に決着をつけるのに十分なものにはなっていない。なぜなら、エヴァンズによる「客観性」の定義には多義性が含まれており、対象が知覚経験からある程度独立しているならば客観的に存在するといえるのか、それとも対象が知覚経験から完全に独立しているときのみ客観的に存在するといえるのか、この点が明確ではないからである。エヴァンズの議論には対象が知覚から完全に独立していることを示す論拠は含まれていない。したがって、エヴァンズの議論は観念論の枠内ではしか展開されておらず、實在論と観念論の対立に決着をつけるには別の議論が必要である、というのが本稿の結論である。

## 二

エヴァンズが（ストローソンの議論を継承しつつ）問うのは、認識の客観性と認識の対象の空間性にはいかなる

関連があるか、という問題である。この問題についてエヴァンズは次のように述べている。

客観的世界という観念と空間的世界という観念の間にはいかなる関連があるか。もし誰かが自分の経験から独立して在り働く世界についての観念をもつならば、その観念によって、彼と彼の経験する現象が共にその中に場所をもつような空間的体系の理解をもたねばならないのだろうか<sup>(3)</sup>。

認識主体が自分の経験から独立して存在する対象を認識するためには、空間において主体自身と主体の経験がひとつの場所を占め、かつ、経験の対象がもうひとつの場所を占めることを認識する必要があるか。これがエヴァンズの提出する問題である。すでに述べたように、この問題について、ストローソンは「対象の空間位置の認識は客観的経験の必要条件である」というテーゼを論証した。このテーゼをエヴァンズは「カント的テーゼ」と呼んでいる<sup>(4)</sup>。

ストローソンの議論についてここで注意しておくべき点がひとつある。それは、ストローソンは、「客観的認識」というよりむしろ「非独我論的意識」の成立条件を問題にしているように書いている、という点である。しかし、ストローソンの議論が本来問題にすべき事柄からすれば、「非独我論的意識」という用語は適切ではない。この点について、エヴァンズは次のように指摘している。

ストローソンが関心をもつ観念は、経験がその経験とは別の何かについての経験であるという観念、したがって、それについてのいかなる経験からも独立して存在しうる何かという観念である<sup>(5)</sup>。

このような観念はむしろ「客観性」と呼ぶのが適切である。実際、エヴァンズは「客観性」の用語を採っている。

エヴァンズは、カント的テーゼを擁護する主要な議論は「経験の主体〔…〕が経験の対象を再同定できねばならない」という要請から空間（の概念）の必要性が生じる」<sup>(6)</sup> というものになる、と分析する。つまり、議論の出発点は、「我々が知覚する対象は個体である」という事実にある。対象を個体として認識するとは、対象の数的同一性を質的同一性から区別して認識することである。数的同一性を質的同一性から区別して認識できるためには、質的に区別できない現象を二回知覚するときに、それが同じ対象についての知覚経験なのか否かを区別できねばならない。数的同一性が質的同一性とは別の同一性である以上、二回の知覚経験の対象が性質において同一であるということは、その対象の数的な同一性を保証するものではないからだ。では、質的に同一の現象を二回経験するとき、その知覚の対象が同じ対象（個体）であるか否かは何によって区別されるのか。これを区別する規準は時空連続性である。つまり、一回目に対象を知覚した時点で対象が位置していた場所から、二回目に対象を知覚した時点で対象が位置する場所まで、対象が連続的に移動できるような経路が存在するときにかぎって、数的に同一の対象を二回知覚したといえるのである。これはエヴァンズが次のように述べるとおりである。

〔…〕私が時点 $t$ に見た玩具が時点 $t'$ まで持続していることを確かめるためには、(1) 時点 $t'$ に私が見た玩具と区別できない玩具が時点 $t$ に存在したことを確かめることだけでは充分ではなく、それに加えて、(2) その玩具が時点 $t'$ の位置へ到達した経路は、時点 $t$ に私が玩具を見た場所から始まっていることを確かめねばならない<sup>(7)</sup>。

このように、数的同一性を認識するためには、対象が連続的な経路を辿って移動したということを確認せねばな

らない。では、このような経路の認識は何によって可能になるのか。この問いに対して、エヴァンズは「地図を所有・使用することによって」と答える。

「種類Kの経験と種類K'の経験の間には必ず種類Kの経験が生じる」という形をした短期の一般化を確立するに十分なほど主体の経験が規則的であると想定するならば、彼の経験する世界について次のような地図を抽出できるように思われる。すなわちそれは、種類Kの対象とK'の対象の間に（「旅程に基づいた (travel-based)」意味での「間に」）種類Kの対象がある、とするような地図である。このような地図をもつことによって、主体は彼の位置の変化と世界の側での変化の区別に経験的な意味を与えることができる<sup>(8)</sup>。

たとえば、机を見た後で椅子を見て、その後で座布団を見る、という経験がくりかえし生じたとき。また、座布団を見た後で椅子を見て、その後で机を見る、という経験もくりかえし生じたとき。このふたつの経験の反復から、机・椅子・座布団を知覚するという経験は必ず「机を見る↓椅子を見る↓座布団を見る」という順序か、あるいは「座布団を見る↓椅子を見る↓机を見る」という順序のいずれかでのみ生じる、という一般化がなされる。そして、事実この一般化に反するような経験は生じないとき。このとき、エヴァンズによれば、経験主体は「机と座布団の間に椅子がある」というふうな椅子の位置を記載した地図をもつことができる。

エヴァンズのいう「地図」とは、同時に存在する諸対象の空間的関係の表象である<sup>(9)</sup>。エヴァンズによれば、対象の位置する場所を認識するためには、地図の使用が不可欠である。なぜなら、対象の知覚に基づく位置の同定を問題にするかぎり、対象の位置する場所は他の対象との間の空間的関係によって全体論的に同定するほかないからである。つまり、場所の同定は、「ある時点にある場所を占める対象があるとすれば、その対象はその時点で他

の諸々の対象といかなる空間的關係を結ぶか」によってなされるしかない。したがって、場所の同定には諸対象間の空間的關係を表象する地図が必要である。この点をエヴァンズは次のように説明している。

我々の思考の対象となるような場所が互いに区別されるのは、我々の参照枠 (frame of reference) をなす対象相互の關係によってである。(…) それゆえ、場所の基本的な同定は、参照枠をなす対象の各々にその場所がいかに關係するかを参照してなされる。このような仕方では我々が場所を思考の対象とするのは、参照枠をなす諸対象の空間的關係を同時に表象する地図の上で場所が同定されるからであろう。このような場所の同定は、「場所はたんに一二つの対象を参照して同定されるのではないから、対象がいくらか動いたり壊されたりしても有効に同定される」という全体論的性格をもっている<sup>(10)</sup>。

エヴァンズの議論の以上の部分をみるかぎり、地図の使用は対象の数的同一性を認識するのに必要だ、と論じているだけである。つまり、たんに、知覚の対象を客観的なものとして認識するためには、場所移動の経路の連続性を認識できねばならないから、そのためには地図を使う必要がある、とだけである。したがって、なぜ地図に「地図を使用する主体自身がどの場所に位置するのか」が記載されねばならないのか、その根拠はいまだ示されていない。

もし、地図に地図の使用主体の位置が記載される必要がないならば、エヴァンズがはじめに立てた問いに対する答えは「否」になるだろう。エヴァンズが議論の始めに立てた問題は、こうであった。客観的認識の成立に、その中に経験の対象と主体自身(主体の経験)が各々の場所をもつような空間的認識は必要だろうか。たんに知覚される対象の位置が記載されているのみで、知覚経験の主体が現在位置する場所を示さないような地図を使用しても客

観的認識が成立するのであれば、知覚主体がその中でひとつの場所を占めるような空間は（客観的認識が成立するために）認識される必要がないことになるだろう。しかし、エヴァンズはそのようには考えていない。エヴァンズによれば、客観的認識が成立するためには、たんに知覚対象がその中に位置を占めるだけではなくて、知覚主体もその中に位置を占めるような空間が認識されねばならない。

では、どこから「地図にはその地図を使用する主体が位置する場所が記載されねばならない」という要請が生じるのか。地図の上で自己の位置を同定する能力が客観的認識に不可欠だとすれば、それはいかなる役割をはたすゆえに不可欠なのか。この問題に関するエヴァンズの見解は残念ながら必ずしも明瞭ではない。しかし、それを明瞭にするために必要な材料はエヴァンズの議論の中にそろっている。鍵になるのは、先に引用した箇所に含まれている「このような地図をもつことによって、主体は彼の位置の変化と世界の側での変化の区別に経験的な意味を与えることができる。」<sup>11</sup>という一文である。次節ではこの問題に関するエヴァンズの見解を再構成する。

### 三

エヴァンズによれば、客観的認識には地図の使用が必要であるだけではなくて、その地図には地図を使用する主体の位置が記載されている必要がある。なぜ、空間内における自己の位置の認識が客観的認識の成立には必要なのか。

知覚の対象が客観的であるとは、対象が知覚経験から独立して存在するということである。対象が知覚経験から独立して存在するならば、対象は知覚されないにも関わらず存在する場合があります。ただ、それだけでは、対象が存在しても知覚されない場合があるとすれば、その場合になぜその対象が知覚されないのかの説明がなければならぬ。したがって、自己の知覚経験の対象を客観的なものとして理解するとは、知覚されずに存在する

対象の可能性を理解し、また、その対象が存在するのになぜ知覚されないのかを理解することである。したがって、このような理解をもつためには、どのような条件がそろったときに対象の知覚が生じるのかを説明する理論をもつ必要がある。この点についてエヴァンズは次のように述べている。

〔…〕「知覚されない存在」あるいはむしろ「あるときは知覚され、あるときは知覚されない存在」という観念は、それだけで成立するものではない。その観念をとりまく理論なしに成立するものではない。彼が経験したのと同じ種類の現象がいかなる経験も生起しないところで生じることはいかにして可能なのか。そのような現象は明らかに知覚可能である。ではなぜ知覚されなかったのか。この問いに答えるためには、知覚についての何らかの基本的な理論、あるいは理論の原型が要求される。知覚されない存在、そして知覚される存在という観念には、それをとりまくこのような理論が不可欠である<sup>(12)</sup>。

エヴァンズがここで主張しているのは、煎じ詰めれば、「知覚の対象を客観的なものとして理解するためには、知覚の生起を説明する理論が必要である」ということである。これは重要な論点であって、強調しておくに値する。では、客観的認識には知覚の生起を説明する理論が必要だととして、この理論はどのような条件が揃ったときに対象の知覚が生起すると述べる理論なのか。エヴァンズによれば、知覚の生起を説明する条件には主体の知覚能力の発現可能性が含まれる。この点についてエヴァンズは次のように述べている。

先行する経験はたえまない「チックタックチックタック…」という音の系列であったが、あるとき「チックタック タックチック…」という音の系列が経験に生じたとしよう。ここで主体が科学的推論の通常の規範〔…〕



に拠って、自分の聴かなかった「チック」が存在したという仮説を立て、主体の知覚能力が発現可能ではなかったという想定によってこの仮説を理解してはいけない、という理由があろうか<sup>(13)</sup>。

「チックタック」という音の知覚が生じるとき、この知覚経験を客観的な対象を表象する経験とみなすということは、この知覚経験の生起を一定の仕方の説明することを含んでいる。その説明とは、ひとつには、「チックタック」という音を聴くという知覚経験が生じたのは、「チックタック」という音が生じたゆえである、という説明である。だが、このように知覚経験が説明されるだけでは、まだ知覚対象の客観性が理解されているとはいえない。知覚の対象たる音が客観的である（知覚経験から独立して存在する）ためには、「チックタック」という音が生じたにも関わらず、その音を聴くという知覚経験が生じないという可能性がなければならない。

そして、知覚されない対象が存在すると想定するならば、その対象はなぜ知覚されないのかがさらに説明されねばならない。そこで、対象が知覚されないのは知覚能力が発現可能ではないからである、という説明が立てられる。この説明では、まず、知覚の生起は知覚能力の発現として捉えられる。そして、対象の知覚が生じない場合には次の二つが区別される。ひとつは、対象が存在しないがゆえに知覚不可能な場合である。もうひとつは、知覚能力が発現不可能な場合である。知覚能力が発現不可能であるならば、対象が存在しても知覚されないのは当然である。

このように、知覚経験を知覚能力の発現として捉えるならば、対象が知覚されるときにも知覚可能であると想定できる。なぜなら、「対象が存在するにも関わらず知覚されないのは知覚能力が発現不可能だから」という説明が成り立つならば、この説明から「もしかりに知覚能力が発現可能であるならば、対象は知覚されるだろう」といえるだろうからだ。このようにして、知覚能力の概念は「知覚されない存在」という観念に内容を与える。この点についてエヴァンズは次のように述べている。

主体は、知覚能力 (receptivity) の概念を使うことによって、とりわけ「もしかりに今知覚能力が発現可能になる (become receptive) ならば、ゆであることが知覚されるだろう」と想定することによって、「知覚されないものがゆである」という観念を理解可能なものにできる、と想定される。しかしながら、これが「今音が知覚されずに存在する」という観念に内容を与えるためには、ゆであることを主体が知覚していることとは別に、主体の知覚能力が今働いていることを示す何らかの規準がなければならない。それはどんな規準でありうるのか<sup>(14)</sup>。

ここで引用した個所の後半でエヴァンズが指摘しているのは、次の点である。それは、「自己の知覚能力が発現可能である」ということの認識が、たんに「自己の知覚能力が発現している」こと、つまり「対象の知覚が生じている」ことの意識にすぎないならば、この認識には経験的な内容がなくなり、空虚になるだろう、という点である。同じ論点を述べている箇所をもうひとつ引用しておこう。

「∴」このような「もし仮に私の知覚能力が発現可能であったならば、知覚しただろう」という類の反事実的」条件文は、自己の知覚能力がそのときに発現可能であることについて、主体がただたんに「聴かれるべくして在るものを聴くことができる」という理解だけしかもてないならば、空虚である<sup>(15)</sup>。

では、自己の知覚能力の発現可能性が経験的に認識されねばならないのだとすれば、それは何によって認識されるのか。エヴァンズはこの問いには明確に答えていない。しかし、エヴァンズの議論の趣旨を酌むならば、次のよ

うに答えるべきだと思われる。

同じように対象が存在する場合であっても、知覚能力が発現可能であるために対象が知覚される場合と、知覚能力が発現可能ではないために対象が知覚されない場合がある。このような発現可能性の有無の違いは何らかの形で説明されねばならない。この説明は、知覚を客観的認識として理解するために必要な知覚の生起の説明に含まれねばならない。「知覚の主体は空間の中に位置をもつ」という想定が意味をもつのはここである。なぜなら、この想定によって、知覚能力が発現可能な場合と可能ではない場合の違いは、知覚主体の空間位置の違いによる、と説明できるからである。知覚主体が空間内に位置をもつならば、「主体にどのような知覚が生じるのかは主体がどこに位置するかに依存する」と想定できる。つまり、主体の位置が知覚能力の発現を条件づけると考えることが可能になる。

たとえば、煙突の付いた家があるとしよう。この煙突は家をどの方向から眺めても見えるわけではなく、特定の方向から眺めたときにのみ見えるのだとしよう。したがって、我々がこの家の周囲を巡るならば、煙突が見えたり見えなかったりする。ここで、あるときは煙突の知覚が生じ、またあるときには煙突の知覚が生じないという違いは何によって説明されるべきだろうか。この違いを我々は通常次のように説明する。あるときには我々は煙突が見える位置にいたから煙突の知覚が我々に生じ、あるときは煙突が見えない位置にいたから煙突の知覚が生じなかった、と説明するのである。そして、このような説明が妥当であるときにのみ、「もし何らかの知覚主体が煙突の見える場所に位置するならば、その主体には煙突の知覚が生じるだろう」といえるのである。

このように、知覚主体の空間位置の違いは知覚能力の発現可能性の有無を決める条件のひとつになっている<sup>(16)</sup>。そうであれば、知覚能力の発現を認識する根拠として知覚主体の空間位置が使えらるだろう。つまり、知覚主体は、自己の知覚経験を意識することによってではなく、空間内における自己の位置を認識することによって、自己の知

覚能力の発現を認識できるだろう。

残る問題は、自己の空間位置が経験的に認識されるか否かである。自己の空間位置が覚能力の発現可能性を条件づけると想定するならば、この想定から次のことが帰結するだろう。主体に特定の対象の覚能力が生じていることは、その対象を覚覚できる位置に自己がいることを示す証拠として働く。また同様に、特定の対象の覚能力が生じていないことは、その対象が覚覚できない位置に自己がいることを示す証拠として働く。このように、「自分にどのような覚能力が生じるのか」は「自分はどの位置にいるのか」を示す証拠となる。しかし、自己の空間位置を認識できるのがただこの証拠に基づいてのみなのであれば、自己の空間位置の認識はアプリアリになってしまいうだろう。なぜなら、「自分はある場所に位置する」という概念に「その場所から覚覚される対象を自分は覚覚している」という以上の内容がなくなってしまうからである。

したがって、自己の空間位置が経験的に認識されるためには、「ある場所から覚覚される対象を自分は覚覚している」という覚覚経験の意識以外に、別の根拠が必要である。そのような根拠が覚覚経験の中に含まれているだろうか。自己の身体の覚覚がまさにそのような根拠になると考えられる。自己の身体が空間内のある所に位置することを覚覚するならば、この覚覚は自己がその場所に位置することを示す証拠になるだろう。「自分の身体がある場所に位置するとき、自分はその場所にいる」というのは極めて当然な陳腐な真理であるように思われるかもしれない。しかし、自己の身体がある場所に位置するのを覚覚すること、そして、その場所から覚覚される対象を覚覚すること、このふたつは論理的に独立であることに注意されたい。たとえば、視覚によって自己の身体がある場所に位置するのを見るのに、聴覚においてはその場所に自分があるならば当然聴こえるはずの音が全く聴こえないかもしれない。こういう場合に、視覚と聴覚でどちらの与える認識が優先されるべきなのか、というのはアプリアリに決着のつく問題ではない。この意味で、「ある場所に自分が位置するならば覚覚されるはずの覚覚が生起するか否

か」と「ある場所に自己の身体が位置することを知覚するか否か」は独立であるから、この二つを根拠にして自己の空間位置を認識するとき、その認識は経験的認識になるのである。

ここまでの議論をまとめると次のようになる。知覚経験を客観的認識として理解するためには、知覚経験の生起を知覚能力が発現可能となる条件によって説明せねばならない。そのような説明によってのみ、知覚されない対象がなぜ知覚されないのが説明され、また、どのような条件を満たした主体にその対象が知覚されるはずなのかが規定される。そして、自己の空間位置は、知覚能力の発現可能性を制約する条件のひとつである。つまり、ある場所に位置する対象を知覚する能力が発現する可能性は、知覚主体の身体が位置する場所に制約される。

さて、ここまで来てようやく、知覚経験が客観的認識として成立するためには知覚主体が空間の中に位置をもつことが認識されねばならないのはなぜか、という問いに答える準備が整った。知覚を客観的認識として理解するためには知覚の生起を制約する条件が認識されねばならず、自己の空間位置は知覚の生起を制約する条件のひとつになっているのであった。したがって、たんに自己の空間位置が変化したことのみによって生じた知覚経験の変化は、知覚の生起を制約する条件の変化によって生じた変化にすぎないから、対象によって生じた変化ではない。つまり、主観的な変化にすぎず、客観的な変化ではない。たとえば、今まで知覚されていた煙突が知覚されなくなったという自己の知覚経験の変化があるとしよう。この変化がたんに自分の身体の位置が移動したために生じたにすぎない場合には、この知覚経験は対象（煙突）が消失したという客観的認識の根拠にはなりえない。それゆえ、対象の存在の有無を知覚経験から独立したものととして客観的に認識するためには、「今まで知覚されていた対象が知覚されなくなった」という変化が自己の身体の移動による変化ではないことが認識されねばならない。したがって、ある場所に位置する対象を客観的に認識するためには、主体自身の位置が認識されねばならない。これが、地図には地図の使用主体の位置が記載されねばならない理由である。

#### 四

前節において再構成したエヴァンズの議論によれば、知覚が客観的認識として成立するためには、知覚主体は、たんに知覚の対象を空間内部に特定の位置を占めるものとして認識するだけでなく、主体自身を特定の空間位置を占める対象のひとつとして認識せねばならない。つまり、自己の位置が記載された地図を知覚主体は使用せねばならない。なぜなら、このような地図は、たんに主体の位置が変化したために生じたすぎない知覚経験の主観的変化から、対象の生成消滅によって生じた客観的変化を区別するために必要だからである。

ところで、そもそもエヴァンズの議論は、「空間の概念の使用は経験に基づく客観的認識に必要な条件である」というカント的テーゼを論証するのが目的であった。この議論が正しいと認めたとして、次に問題になるのは、「空間の概念の使用は客観的認識を成立させるのに十分な条件なのか」ということであろう。つまり、対象の位置と共に自己の位置が記載された地図の使用によって知覚経験の主観的変化と客観的変化を区別する、ただこれだけで客観的認識は成立するのか、という問題である。

エヴァンズは地図の使用によってただちに客観的認識が成立すると考えているようである。エヴァンズは『指示の多様性』において次のように述べている。

「基本的な水準においては〔…〕時空的世界について思考することはその世界の認知的地図に支えられて思考することである」と言うことは、我々の思考は基本的水準ではある意味で「客観的」だという点を強調することである。どの場所も他の場所と同じように表象されるので、基本的な水準の思考を表現するときには「ここ」とか「あそこ」という語を使わなくともよい。（しばしばこのような思考において我々は三人称的な視点、あ

るいは神の視点をとっているとされる。しかし、すでに（第四章第二節で）説明した理由で、わたしはこのような見方を拒否する。この言い方は理想的検証主義を表現しているが、しかし思考とは真に客観的なものであって、どの視点からのものでもない。（17）

この引用文中で指示されている同書の「第四章第二節」では、次のように述べられている。

空間的世界についての我々の思考はモデルあるいは地図の使用を（おそらく必然的に）伴う。〔…〕誤りは、このようなモデルを構築する際に「可能な経験の内容について思考しているのだ」と想定してしまうところにある——この誤りによって理想的検証主義は避けられなくなるのだが（18）。

ここで示されているエヴァンズの見解をまとめると次のようになるだろう。事物の空間位置を認識するためには地図が必要であるが、地図は可能な知覚経験の内容を表現しているわけではなく、むしろ可能な思考の内容を表現している。ここで、知覚と思考の違いは、その内容が空間内の視点に拘束されているか否かにある。つまり、内容が「空間内のある場所に位置する視点から表象されるもの」として表象されるか否かの違いである。地図の上には、物体が特定の場所に位置するという内容が表象される。ここで、「その場所に位置する物体は別の場所に位置する視点から眺められている」ということが表象されているならば、この内容は視点に拘束されている。このように地図の上に表象された内容が視点に拘束されていると考えると、「理想的検証主義」に陥るとエヴァンズはいう。

エヴァンズは「理想的検証主義」の内実を正確に規定していないが、これはおそらく、理想的に証拠がそろった状況において正当化される真理を真理そのものと同一視する立場を指すと思われる。このような立場によれば、ど

のような判断についても、その判断の真理を正当化（検証）する証拠が理想的にそろった状況を想定することができる。そして、このような理想的状況において正当化される真理と真理そのものを区別することはできない。したがって、真理は対象との対応によって定義されるよりも、むしろ理想的状況における正当化によって定義されるべきである、とされる<sup>(19)</sup>。

知覚される対象の空間位置について理想的検証主義を適用するならば、それは大雑把にいつて次のような立場になるだろう。どのような対象についても、ある時点におけるその位置を知覚するのに理想的な状況を考えられる。この状況においては、対象の位置を知覚するのに理想的な場所があり、その場所を視点としてそこから対象の位置が知覚されている。対象の位置についての真理は、このような理想的視点から対象の位置がどのように知覚されるかによって定義される。

このような理想的検証主義の立場に立つならば、地図に表象された内容が視点に拘束されたものであるのは自然であり、また当然でもある。なぜなら、この立場では、対象が特定の空間位置を占めるといことは、理想的視点からは対象がその位置を占めることが知覚されるということに等しいからである。したがって、地図が対象の空間位置を表象するものであるならば、表象される内容は視点に拘束されている。こうして、理想的検証主義を採るならば地図の内容が視点に拘束されたものであることは当然のものとして説明される。それで、地図の内容を視点に拘束されると考えると理想的検証主義に容易に陥ってしまうのである。

しかし、エヴァンズの見解によれば、地図に表象された内容は視点に拘束されたものではない。なぜなら、地図が表現するのは可能な知覚の内容ではないからである。もし地図が可能な知覚経験の内容を表しているのであれば、どの経験も特定の場所を視点としてそこから眺められねばならないから、地図のどの場所もどこかの視点から眺められたものとして表象されねばならない。だが、地図は特定の視点から見られた知覚光景を表象するわけではない。



地図が表象するのは可能な知覚の内容ではなく、可能な思考の内容である。したがって、地図の上ではどの場所も完全に同等に表象される。だから、地図の使用主体の位置する場所をいかなる点でも特別視する必要はない。

たしかに、客観的变化を認識するためには、主体の空間位置が認識されねばならないから、地図の上に主体の位置が表象されねばならない。しかし、だからといって、地図に表象された内容を思考する際には、その場所を自己の位置する場所として、つまり「ここ」として表象する必要はない。それゆえ、地図の上で表象される思考の内容は視点に拘束されたものではない。したがって、その真理も視点とは無関係である。

ところで、ここで思考は知覚と内容を共有するのだから、内容が視点に拘束されるか否かという点で違いはあるにしても、思考される内容の真理が視点とは無関係に成立するのに、知覚の内容の真理が視点に拘束されると考えるのは無理がある。思考と知覚が内容を共有する場合には、思考の内容が真であるならば、知覚の内容も必ず真であるはずだからである。したがって、思考の内容の真理が視点と無関係に成立するのであれば、知覚の内容の真理も視点とは無関係に成立する。つまり、知覚主体の位置は知覚内容の真偽にはまったく関係ない。こうして、理想的検証主義のように、理想的な視点からの知覚経験によって知覚の真理が定義されると考える必要はない。以上がエヴァンズの見解だと思われる。

このようなエヴァンズの見解を正確に評価するためには、「客観性」の定義にたちかえる必要があるだろう。エヴァンズは「客観性」を、「経験がその経験とは別の何かについての経験であるという観念、したがって、それについてのいかなる経験からも独立して存在しうる何かという観念」<sup>(20)</sup>として定義していた。実は、この定義は強い読みと弱い読みの二つの解釈が可能である。

この定義は、強い読みをとるならば、「対象があらゆる可能な知覚経験の総体から独立して存在しうるとき、認識は客観的である」という意味に解釈できる。このように解釈するならば、客観的認識の対象は、あらゆる可能な

知覚経験とはまったく無関係に存在しうる。したがって、対象はいかなる知覚経験ともまったく偶然的に関係するにすぎない。

これに対して、弱い読みをとるならば、先の定義は「対象がどの特定の知覚経験からも独立して存在しうる」とき、認識は客観的である」という意味にも解釈できる。この解釈によれば、客観的認識の対象は、どのような可能な知覚経験からも独立に存在するが、あらゆる可能な知覚経験から独立に存在するわけではない。したがって、この解釈にしたがえば、むしろ、次のように想定することもできる。つまり、対象が存在するためには、何らかの可能な経験と関係をもたねばならない、たとえば対象が存在することを示す証拠となる知覚経験の生起が可能であるのになければならない、と想定することもできるのである。

前者の定義は認識の対象が客観的であるために後者の定義よりもいっそう多くのことを要求する。したがって、前者の解釈によって定義される客観性の概念を「強い客観性」と呼び、後者の解釈によって定義される方を「弱い客観性」と呼ぶことができるだろう。

問題は、エヴァンズの議論がすべて弱い客観性の概念に基づいてなりたっていることである<sup>(2)</sup>。理想的検証主義は、知覚の真理を特定の視点からの知覚と同一視するから、認識が弱い客観性をもつことを否定する立場になる。エヴァンズの議論は、理想的検証主義を斥け、知覚に基づく認識に弱い客観性が成立することを論証している。しかしながら、エヴァンズの議論には、知覚に基づく認識が強い客観性をもたねばならないことを示す要素はなにもとつ見当たらない。

エヴァンズの議論が妥当であるためには強い客観性は必要ではない。これを明白にするには、知覚に基づく認識が弱い客観性をもつことを認めながらも、強い客観性をもつことは否定する立場を考えてみるのがよいだろう。知覚の対象は知覚経験に依存して存在すると主張する立場を総じて「観念論」と呼ぶとすると、認識にどの程度の客

観性を認めるのかに依じて、観念論にも強弱の度合を区別できる。認識に弱い客観性さえ認めない立場、つまり理想的検証主義のような立場を「強い観念論」と呼ぶならば、弱い客観性は認めるが強い客観性は認めない立場は「弱い観念論」と呼べるだろう。

弱い観念論によれば、ある知覚が真であることを示す証拠となるような知覚経験がどれだけ蓄積されても、その知覚が真であることを論理的に保証するに足る証拠が集まることはない。論理的には、その知覚が偽であることを示す証拠となる知覚経験が生じる可能性が常に残されているからである。したがって、どのような知覚経験の蓄積を想定しても、それが知覚経験の特定の有限な蓄積であるかぎり、知覚の真偽はそれとは独立に決まる。それゆえ、知覚の対象はどの特定の知覚経験の蓄積からも独立に存在し、弱い客観性が成立する。

しかし、いかに知覚経験が蓄積されても論理的には反証可能性が残されるということから、知覚の真偽があらゆる知覚経験の総体とは独立に決まるということとは出てこない。真だとされた知覚が反証されるときには、その知覚が偽であることを示す知覚経験が存在するはずである。この点を考慮すれば、あらゆる知覚経験の総体から独立した対象が存在することを知覚経験に基づいて認識することは不可能である、と考えられる。したがって、知覚に基づく認識が強い客観性をもつとは考えられない。

このような弱い観念論の立場はエヴァンズの見解と両立しうる。なぜなら、エヴァンズの議論には、弱い観念論を斥ける根拠は何も含まれていないからである。そもそも、エヴァンズの見解にしたがうならば、客観的な真理はどのようにして認識されるのだろうか。これをふりかえてみれば、エヴァンズの議論に知覚に基づく認識において強い客観性が成立することを示す議論が含まれないのは当然であることが明白になるだろう。

エヴァンズは地図の使用によって客観的認識が成立すると論じる。ここでいう「客観的認識」とは、要するに、知覚経験の変化のうちに対象の位置変化によるもの（客観的变化）と主体の位置変化によるもの（主観的变化）を

区別することによって成立する認識である。このふたつを区別するのに必要なのが対象と主体の位置が記載された地図である。この地図は経験の一般化に基づいて作成される。つまり、エヴァンズの議論において、認識の「客観性」は知覚経験の中に主観的变化と客観的变化を知覚経験に基づいて区別することにおいて成立する。

ここで「知覚の対象はあらゆる知覚経験の総体から独立して存在する」などと想定する必要はないのは明白であろう。したがって、強い客観性は必要とされない。また、「地図に表象される内容は思考される内容であって、視点に拘束されないものである」という論点も、地図が知覚経験の一般化に基づいて作成されるものである以上、強い客観性を空間位置の認識に認める根拠にはなりえないことは明白であろう。

結局、エヴァンズの議論における「客観的認識」とは、知覚経験の中に主観的变化と客観的变化を分ける線を引くことにすぎない。エヴァンズのいう「客観性」はいわば知覚経験の中で構成される客観性以上のものではない。したがって、エヴァンズの見解は観念論の域を出るものとはなっていないのである。

以上の議論からわかるのは、知覚に基づく認識が強い客観性をもつならば、認識が成立するためには、対象と主体の位置が記載された地図の使用に加えてさらに他の条件が必要になる、ということである。あるいは、弱い観念論が主張するように認識が強い客観性をもつと考えるのは誤りであり、強い意味での客観的認識の成立条件を問題にするのは無意味なのかもしれない。いずれにせよ、すでに明らかのように、エヴァンズの議論においては強い客観性をめぐる問題は扱われてない。知覚に基づく認識が強い客観性をもつのか、もつとすれば強い客観性が成立するためには何が必要なのか。エヴァンズの議論の妥当性を認めたとしても、この問題は残る。

この問題の検討はもはや本稿の範疇を超えるが、この問題を解決する道筋について、私見をかんとんに述べて本稿を閉じることにしたい。知覚に基づく認識が強い客観性をもつならば、知覚の対象はあらゆる可能な知覚経験の総体から独立して存在しうることになる。これは、対象は知覚されるか否かとはいまったく無関係に存在しうるこ

とを意味する。つまり、対象にとって知覚されうることは完全に偶然的な事柄なのである。しかし、知覚の対象にとって知覚される可能性をもつことが偶然的であるということ、知覚に基づいた認識の中で論証することは無理であるように思われる。けっして知覚されないかもしれない対象が存在しうることを知覚経験に基づいて論証することは原理的な困難があるように思われるのである。では、経験的認識論の枠を超えた形而上学に訴えなければ、認識が強い客観性をもつことは正当化できないのであろうか。必ずしもそうではないと考えられる。もし、知覚経験を表象(記号)として機能する物理的状态と同一視する表象主義的な物理主義の立場が正しいとすれば、対象にとって知覚されうることはまったく偶然的だといえるだろう。なぜなら、この立場が正しいならば、知覚経験は一定の物理的状态と同一視され、その物理的对象と知覚の対象との間にはいかなる必然的な関係も成立しない、ということになるだろうからだ。そして、このような表象主義的物理主義は経験的認識論の枠組において正当化可能であると思われる。

このような道筋を辿って強い客観性をめぐる問題がどこまで解決されるのかを検討することは今後の課題としたい。いずれにせよ、認識の強い客観性をめぐる問題は、エヴァンズが示した議論の枠組を超えた議論を要求する、ということはずでに明らかであろう。

註

(1) Peter F. Strawson, *Individuals*, Methuen, 1959, chapter 2; Gareth Evans, "Things Without the Mind" (1980), reprinted in his *Collected Papers*, Oxford University Press, 1985.

(2) ストロウソンの議論の独創性は聴覚のみに知覚能力が限られた主体について考察した点にある。エヴァンズの議論も聴覚によって認識される二次性質をめぐる問題を考察の中心にしている。そのため、本稿で扱う問題は両者の議論においては充分には扱われていない。

- (3) Ibid., p. 249.
- (4) Ibid., p. 250.
- (5) Ibid., p. 251.
- (6) Ibid., p. 252.
- (7) Ibid., p. 259.
- (8) Ibid., p. 255. ここでエヴァンズは、種類Kの経験が種類Kの対象の表象として働いているという表象主義の立場を採っている。つまり、経験Kの生起から対象Kの存在を推論できることを前提にしている。
- (9) Gareth Evans, *The Varieties of Reference*, Oxford University Press, 1982, p. 151.
- (10) Ibid. 「基本的」(fundamental) という概念については Ibid., chapter 4, section 4 を参照。
- (11) Evans, “Things without the Mind”, p. 255.
- (12) Ibid., p. 261-2. エヴァンズは、ストローソンの思考実験に登場する「聴覚によってのみ対象を認識する経験主体」を「Hero」と呼んでいるが、本稿ではそれをたんに「主体」と訳す。
- (13) Ibid., p. 264. エヴァンズの使う「receptive」の語を「知覚能力が発現可能である」と意識する。
- (14) Ibid., p. 267.
- (15) Ibid.
- (16) 知覚能力の発現可能性を制約している条件としては、ほかにも対象周囲の明るさなどの環境の状態や、眼や耳などの知覚器官の状態など多くのものがあるだろう。これらのほかの条件に比べて、知覚主体の空間位置という条件は、エヴァンズの議論において特別な位置を占める。なぜなら、すでに述べたように、エヴァンズの議論は知覚対象が個体であることが出発点であり、この出発点から、対象の時空連続性を主体が認識できねばならないことがアプリアリに帰結する。それゆえ、主体が対象の空間位置を知覚できることもアプリアリに帰結する。しかし、同じ出発点からは、主体が対象の位置以外の性質を知覚できることはアプリアリには出てこない。したがって、主体の位置以外のものが知覚能力の発現可能性を制約すると想定しても、その制約条件を主体自身が知覚によって認識できることはアプリアリに保証されない。これに対して、もし対象の位置を知覚するのと同じ能力によって主体の位置を認識できるのであれば、主体自身の位置を主体が認識できることはアプリアリに保証されることになる。実際、後で論じるように、主体の位置と位置を同じくする対象、すなわち身体

を知覚することによって主体の位置を知覚する場合がある。この場合には、主体の位置を認識する能力と対象の位置の認識する能力はまったく同一の能力である。

- (17) Evans, *The Varieties of Reference*, p. 152.
- (18) *Ibid.*, pp. 99–100.
- (19) このような理想的検証主義の一例は、パトナムが一時期採った「内在的実在論」である。Cf. Hilary Putnam, *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press, 1981.
- (20) Evans, “Things without the Mind”, p. 251.
- (21) 本稿では検討しないが、実はこの点ではストローソンの議論も同様である。